

少彦名の上洛

倭国への朝献の品曰天叢雲劍^{あまのむらくものつるぎ}を確^{いっか}り携^{たず}

え持^もつた少彦名は、大己貴との別^{わか}れを惜^おし

つつ船上の人となつた。

船には、少彦名が自ら釀^{かも}してつくつた神

酒^{さけ}も船中へ運び込まれていて、――芳^{かぐめ}しい

香^かりがあたりに漂^{ただよ}っていた。容易^{ようい}ならぬ

「それでは、これから長い航海^{かいかい}難儀^{なんぎ}な

船旅^{ふねたび}とこそ思^{おも}われますが、た^たただひたすら

不^ふ御^ご無^む事を祈^{いの}っておりますぞ」

船は、母^{はは}の根国^{ねくに}(難波^{なにわ}あたり)の岸^き辺^べを離^{はな}れ

ると、茅渟^{ちのうみ}海^{うみ}(大阪湾^{おさか湾})を一路南下^{いちろなんか}していつ

た。乗^のる船^{ふね}南部^{なんぶ}

「こうして少彦名は、口淡島^{あはしま}に(リ紀伊国加

太^{あはしま}と淡路島との間の海峡^{かいきう}に浮^うぶ友^{とも}ヶ島^{しま}の属島^{ぞくとう}

淡島^{あはしま}へ現在の神島^{かみしま}のこ^ことであらう)に至^{いた}つ

た。

※なお、少彦名命^{すくなひみな}を祭神^{まつかみ}とする曰淡島神社^{あはしま}に

㊦2652^r

紀上129^r

2,594^p-3/2

あは
阿波口
地名87^p

㊦2596^p

地名422^p1091^p
社大833^p
紀上129^p

「荒筋」第一編

「出雲国の国造り」

において既述

は、初め、友ヶ島の属島淡島にあつたか、仁
徳天皇の御代に加太（形見浦）の現在地へ移

されたという。「帝国地名辞典」太田為三

郎、名著出版へ加太へ友ヶ島。日本社

寺大観「名著刊行会へ加太淡島神社」参照

「少彦名は、淡島から

粟山（阿波）韓山（拘奴国）に縁り、

瀬戸内海の南岸に沿つて密かに西進していつた

少彦名は果敢にも瀬戸内海を押し渡つ

てゆこうとしていたのだった。その時には

なお、神代紀上第八段一書第六に、次のよ

うに記されてゐる。に潜り込むつもりだたのかも知れない

「少彦名命、行きて熊野の御崎に至りて、

遂に常世郷に通しぬ。亦曰はく、淡島に至り

て、栗茎に縁りしかば、弾かれ渡りまして常

世郷に至りましきといふ

米

ところか、どうしたというのだらう。拘奴

国中の狼煙台という狼煙台から、突然にも盛

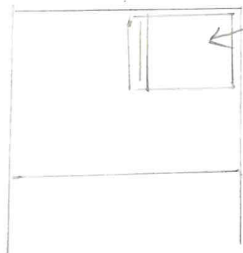
んな煙が立ち昇つた。敵軍の襲来を知らせる

・カラー

・上下を間違えないで下さい。

・左頁の左上(1/4頁)に、大きくはみ出して掲載下さい。

(上)



2,595⁷-2/3



中々399644

1324

1424

写真図版423 鳴門海峡の渦潮

『朝日新聞』平成29年3月16日付<春>3<3>参照。

新ヤ(1)-133P
-140P「小町」151P 2,595P-3/3
かいなんえん そうせん
海難360 馬強 1291P
前頁115 115頁にせよ

郡

参考

・「拘奴国」の者達は、我々を察知して狼煙を

上げたわけではなさそうだ

■少彦名は「ほ」と胸をなでおろした

髪

「も」かいたら、西の倭国の軍が、拘奴国

へ攻め懸っていったのかも知れないな。しか

しともあればこの騒然としている時に、拘

奴国の真只中を通って行くのは危険だ。

海が非常に荒れて、海難の恐れもある

か、伊豫二名(四国)の南をぐるりと廻つ

て倭国へ着ぎ至る(三)にしよう

＊尚、往古には、四国の総称として「阿波国

とも「伊予二名の島」とも呼んだという

「古事記」新潮社、三〇頁、注四参照

「荒筋」第二編「東・西の同一の地名」において既述

*

敗軍の将は兵を語つて主かんを
(赤) 2579 帰還 576

止む
(赤) 2579
(赤) 2512 2,596

紀上 129
(赤) 2594-3/2
(赤) 2594-3/2
黒潮最新基本地図(白) 2579
小林 1055P
波風 562P
16P 土佐日記 九節 91P (改訂)

激しい

次々にやってくる

随分、そのおもしろいところ

太平洋の荒波が、小船は波風の随に翻弄され続けた。

だが、海の男たちは、襲いかかる怒濤を

ものともせず、黒潮の流れに逆らい、

激しい大波が白く打ち寄せる岩場を縫うよ

うに船を操って、西へ西へと進んでいった。

つまり、少彦名は、淡島に至り、粟阿

波は、日韓(拍収国)にのぼり、日熊野の

御崎から日常世郷(倭国)へと、まさ

に弾け飛びかのように漕ぎ進んでいった。

といえよう。(神代紀上第八段一書第六参照)

なお察するところ、少彦名は、邪馬台国

ら拍収国へ出征した時から三年以内に、邪馬

台国の都に戻つて来たか、たまたまであるう

かし、仕方がないとは、いえない。大幅

に遅れてしまったものと思われる。

「邪馬台国の都を出発してから、もうすで

に三年以上の年月が過ぎてしまったというの

に、四またに復命も出来得ないでいる。

都の着達は、私が四年たつた帰還しない

敗軍の将として帰国すること躊躇いもあり、また止む

得ない事情もあって、

香椎に上り134³ 全社 2595 2 1/2 11行 7
 2600 2602 2602 1/2 2,597

上の天浮橋を渡った

東の母国で幾度としれず夢にみた奇霊の二
 邪馬台国へ帰ってきた少彦名は、
 豊国から、神山曰阿蘇山を越え、ついに

時、誰もが目を驚かした。
 全く思い掛けない人の突然の帰国の
 報は、
 たちまちのうちに伝えられた。

「おお、やはり左様ですぬ
 天穂日命が生きていたということを知った

「貴方様は、もはや、天穂日命ではありません
 せぬかし
 国の方へと歩を進めていった。
 少彦名は、これより陸路を辿って、邪馬台
 国の都へと歩を進めていった。
 豊国の岸に着いた

(X)

はまへ
 10

2512^P 四夷館
洛陽から記64^P

561.5.31(土)⑥
P

2598^P

152^P
弥加

練子 1732^P 優雅 1036^P 大宮人 282^P
(隊伍と組んで行進) 大宮人 282^P
下 蕭 1094^P → 字に鳥の
あかぬけしたま 用いそ

その天浮橋の北に都城が有った。
広大な邪馬台国の都は首に変らず美しかった。
優雅な大宮人達は香り高い繁栄を謳歌してい
た。
眩しいばかりに目もあやな着飾る人達も
婦人達の楽しそうな笑顔や下
隊を組んだ武人等の意気高らかな
は大路を練って進んでゆく光景が見られた。
眼前に威容をもつて迫る宮城正門の両脇
には朱雀闕が鬱然とて天に聳え立ってお
り、その宮城の威容を弥加上にも際立たせて
いた。
(九六城)
「ああ、懐かしく麗しい邪馬台国の都よ
少彦名は、思わず感嘆の声をあげていた。
しかし、母国からの朝貢の使者として来朝
した少彦名は、すぐに宮城内へ入ることを許
されたわけではなく、都城外の夷館が宛が
わかれ、暫らくの間待たされた。

2599P-1/2

●さうとも、邪馬台国の都の者達には、すくなくらぬ戸惑いがあった。

●「今はもう、母人になつてしまつて、名もすくなくみな

少彦名と変えてしまつたのださうよ」

●「額の貴人の印、二並びの點を消してしま

つたのでは、倭人に戻りようもないわね」

●「可哀相なのは、あの人の奥様だわ。そ

のうち必お生きて歸つてくると信じて待つて

たというのに、戻つて来るなり別れ話なの

ですもの、返き暮しておいでの毎日ださうよ」

●「そのうえ、天徳日命の子の、大背飯三熊

え大人にも、東の拘奴国平定に出かけたまま

歸つてこないしね。ほんとに、慰めようもな

いわし

●人々は、ひそひそと噂するのだった。

●なお、神代紀下第九段本文には、こう記さ

れてゐる。

「天徳日命を以て往きて平けしむ。然れど

も此の神、大己貴神に倭り媚ひて、三年に比

及ぶまで、尚し報聞さず。故、仍りて其の子

令和元(2019)7.13(土)~7.14(日)
令和2(2020)2.22(土)~2.23(日)

$$2.599^P - \frac{3}{2}$$

左か 小井 大か
 11月 1058^p 2438^p
 半か 左か 2652^p 2652^p

$$\begin{array}{c} \frac{2}{23} \text{IF} \frac{2}{23} \\ \frac{2}{22} \end{array}$$

大背飯三熊え大人、亦の名は武三熊え大人を
 遣す。此亦還其の父に順ひて、遂に報聞さ
 す。云々
 父に順い下
 邪馬台国を後にした日
 大背飯
 三熊え大人
 追つて思うところ
 を述べたい

コクヨ ケー20 20×20

2601-3/2 紀上362^P

213
+ 120
333

2,600^P-1/3

紀上350^P

2631-3/3 三輪山に火を3

957

去來紗別から與田別への改名

丁度その頃

(三三三年二月頃)

去來紗別

尊(応神天皇)

は、

武内宿禰を従え、禊祓

よ

うと

香椎

に地理的に相当する所

に

口

香椎

へ行き、飯宮を造って住んでおられた

に

①神功皇后紀撰政十三年二月八日条に、

(神功皇后は)武内宿禰に命せて、太子

実は応神天皇

に従ひて、角鹿の筥飯大神を拝みまつらし

とある。

とある。

*この物語では、神功皇后撰政十三年(二一

三年)を二巡下げて、三三三年のことと解し

た。

②応神即位前紀には、

越国に行いて、角鹿の筥飯大神を拝祭みたて

まつりたまふ。時に大神と太子と、名を相易

神功皇后記
 神功皇后記

へたまふ。故、大神を號けて、去來紗別神と
 曰す。太子をば與言田別尊と名くといふ。然ら
 ば、大神の本の名を與言田別神、太子の元の名
 をば去來紗別尊と謂すべし。然れども、見ゆ
 る所無くして、未だ詳ならずし

③ 神功皇后記には、

「建内の宿禰の命、その太子を率て、禊せ
 おといて、淡海また若狭の国を経歴し時に、
 高志の前の角鹿に、飯宮を造りて、太子を」

坐さしめき。しかして、そこに坐す伊奢沙和
 氣の大神の命、夜の夢に見えて云らるく、
 「汝が名もちて、御子の御名に易へまくほ

云々し
 とある。

角鹿(敦賀)
 角鹿(敦賀)

なお、

越前

へこの当時、福井県(敦賀)は、未

だ倭国の領有圏内に入っ
 と考えたい。

日本社年
氣比神宮 2437
香椎宮 534

7,600 P-3/3

凡士記 465

た人ニ
丹後半島を5謝
1509-3/4

とある。
また、因みに述べると、

そこでも

丹後半島を糸島半島、

若狭湾を博多湾に

それぞ小見たてると、

敦賀は香椎に相

当する

ように思われる。

越前国

風土記逸文

ハ氣比神宮

条には、次のように記されている。

風土記に云はく、氣比の神宮は、宇佐と

同體なり。八幡は應神天皇の垂跡。氣比の明

神は仲哀天皇の鎮座なり

氣比神宮の祭神は、仲哀天皇・神功皇后・

元神天皇・武内宿禰等七柱である。

香椎宮の祭神は、仲哀天皇・神功皇后・元

神天皇・佐吉大神である

名著刊行会、ハ氣比神宮ハ香椎宮参照

恐らく

氣比神宮と、香椎宮との間には、何らか

の深い関連性がある

のであろう

そして、ハ氣比の神宮は、宇佐と同體なり

と記されているところからみて、

へ氣比神宮は、宇佐神宮と同體として創建
されたといいことなの~~であ~~うう✓
と想像される。
■ なにしろ、先に述べたように、
へ初代の仲哀天皇が薨去された時、襲名
て第二代目の仲哀天皇になられたのは去來紗
別命(後の応神天皇)であった~~であ~~うう✓
と思われろ。(第一表参照)
■ 確証はないが、往古において、
へ香椎宮・宇佐神宮・氣比神宮は、皆同體
と考えられていた~~と~~な~~る~~う~~う~~
と推察される。
*
■ 経緯が あったのであろう。
① 三三三年二月八日、香椎に祭られていた大
神日與言田別神に記には伊弉諾沙和氣大神とある
名を取り替えた後の結果が述べられてい
るのであろう。か、倭王応神天皇曰去來紗別
尊の夜の夢に現われて、こう仰せられた。

下 4444(休) ② 956 下 3/4 紀上362 宇合(95) 2600 勸請 494 2600 紀上362 末39 3/4

2,601P-2/2 婚流 1435 紀上362

夜の夢 2600P-2/3 12分 天神 紀上194 5分 永神 記(18) 紀上362

「天神の御子の名曰去來紗別尊」と、私の今の名曰譽田別神とを取り替えようではな

② 倭王は、夢のことを武内宿禰にお語りになった

武内宿禰は、神を祝福しよう申し上げた。有難い夢でございます。ご神託のとおりにな

③ 早くで大神を號けて去來紗別神と曰すようになり、太伯の婚流の御子(応神天皇)を譽

田別尊と名けたと解される。

すなわち、大神のもとの名は譽田別神であ

り、一乃、太子(月読尊)の頃から応神天皇初期頃までの元の名は去來紗別尊であ

た、ということなのであろう。辛卯年(三三三)に三韓を得た去來紗別尊は

この勝利を契機として、三三三年に名を改め

譽田別尊と名告られたのかも知れない。もつとも、名を取り替えた後の去來紗別神

が、何時頃、香椎から敦賀へ勸請されたのか、遷られたのかは詳らかでない。【木前述の、天神即位前紀によると、尊飯大神】

2609^{p-1/2}版 2月 17日
2600^{p-1/3} 2月 8日
333年 紀 250^p 9

2,602^{p-1/2}

2608^{p-2/2} 内情を探して 2598^{p-1/2} 左
史実と伝説 2604^p 左 史実 2604^p 左 史実 2604^p 左

すくなひこな
少彦名の朝貢

その数日後、倭王磐田天皇（応神天皇）の

もとに、

あまのほひのみこと

「天穗日命が、東の国の内情を探って、邪

馬台国の都へ帰還致しました

と、いう早打の知らせが伝えられた。

「そうか。それは何よりの朗報だ」

磐田天皇は、武内宿禰を従え、急遽、邪馬

台国の都へ向かって出立された。

不彌国（宇美国）から奴国を経て、筑後川

を下り、邪馬台国の都城内へ洛陽城の内へ

磐田天皇がお入りになったのは、

その名を改められてから九日後のことだった

ようである。

神功皇后紀撰政十三年二月十七日条に、

「太子、角鹿より至りたまふ。云々」

と記されている。

三三三年二月十七日に、磐田天皇（応神

鹿を渡り 魏太倭50° 面持 329°

小村 579° 紀下190° 朝廷紀下190°

2,602°-2/2

朝廷紀下190° 紀上134°

小村 247° 魏太倭39° 鄭重 1517°

に到り下

かゝるた 2604 5行

天皇が、香椎から邪馬台国の都へ歸着さ小
と解釈した。こくに、譽田天皇は仰せられた。
東国の日拘奴国に討伐に赴き、いま報聞
の爲に帰還したという天穗日命を、早速にも
鄭重に朝廷へ案内してくるかよい

導者に従い、外郭城の内へ入った
少彦名は、宮城門および南宮門を通つて、広
大な朝廷の最奥、倭王の前に畏ると、厳肅な
面持で両度再拝み、使の旨を言上し述べた。
東海の外の絶域にある日母国に王・
葺根の使者として、遠きを涉り、道路勤勞し

怪しんだ 2590 12/2 155 2603 親を偽 50 平伏 推古紀 1989 1905 95国 64P

朝貢に参上^{まじり}した^{すくなく}少彦名と申^{もう}す者^{もの}でございま
す。倭国^{わこく}が、海北^{かいほく}の^{すくなく}九十五国^{きゅうじゅうごこく}を平定^{へいぜい}されたと
聞^きき及び^{およ}びましたので、^{すくなく}おのれも取りあえ^まひそ
その戦勝^{せんしょう}の祝詞^{しうご}を申し述べ^{もう}るためにやつて参^{まじ}り
ました。
ここに少彦名^{すくなくひこな}は、鄭重^{ていじゅう}この上^{うへ}にもない礼儀^{れいぎ}を
もつて平伏^{ひれふ}した。
●^{すくなくひこな}少彦名^{すくなくひこな}のかたわらには、倭国^{わこく}への献上品^{けんじやうひん}として持^も
参^{まじ}した。天叢雲劍^{あまのむらぐも}と御酒^{みさけ}とが置^おかれてい
た。
母国^{もこく}王^{おう}・葦根^{あしぎね}の忠孝^{ちゅうこう}、朕^{わが}が心^{こころ}にかな^{かな}い嬉^{うれ}
しく思う。我が国^{わがくに}において^{おいて}は、母国^{もこく}に
ついてほとんど知られていない。母国^{もこく}の由来^{ゆらい}
を述べ^{もう}るがよい。
●^{すくなくひこな}倭王^{わおう}に聞^きわゆるままた、少彦名^{すくなくひこな}は、素戔^{すさ}
鳴尊^{なりのみこと}追放^{ついほう}の事^{こと}から始めて、^{すくなくひこな}順次^{じゆんじ}熱^{ねつ}を込^こ
め、^{すくなくひこな}悉^{しつ}に語^{かた}っていった。
●^{すくなくひこな}市杵嶋姫命^{いちきしまひめのみこと}・與^よ田^た天皇^{てんかう}および並^{なら}み居^いる者^{もの}達^{たち}は
少彦名^{すくなくひこな}の口^{くち}を衝^ついて出^でる。
●^{すくなくひこな}素戔^{すさ}鳴尊^{なりのみこと}の壮烈^{そうれつ}で、苦難^{くなん}に満^みちた母国^{もこく}
の口^{くち}国造^{くにぞう}り^りの物語^{ものがたり}に
に息^{いき}を呑^のんだ。

②446 ②654 ②1809 ②50 ②56 ②33 ②37 ②605^P-3/2

②56 ②33 ②37

母国王葺根の心根をばお汲み取り下さつて、
何卒、この大刀をお納めいたたきたく存いま
す。少彦名は、天叢雲剣を目の上に捧げ、
恭しく差し出しなから言つた。
「うむ。こ小は正しく天下の名剣、神しく
も異にき剣よ。」
譽田天皇は、さつと抜き放つた大刀のただ
ならないギラギラした光に「心を奪われたか
のように感じ入り、見つめつづけた。

「母国王葺根の忠孝、甚だ哀れに思はれ、
よつてここに親倭母王と爲
し、葺根を「天え葺根」と呼ぶことにす
る。また、祖母の都度閑知泥をば「天え都
度閑知泥」と呼ぼう。」（魏志倭人伝参照）
その倭王の言葉に、少彦名は我が事のように

必ずやん440⁷
(後に推量の語を伴う) 戦支後
(後)64⁷

2,606^P

くっし 屈指634^P 天神紀上208⁷
指折り数えること

に感激し、こう言った。

素戔鳴尊の授けた須佐之男命の創建にな

る日母国は、すでに、拘奴国のはての国々

の中では屈指の存在となり、随分と大きく強

くなりました。

これは申すまでもなく、偏に、天神の厚い

御加護があつたからです。

その天神の直系の御子倭王から、日

根といふ名を賜わつて、我が大己貴はどん

なに喜び、有り難く感謝申し上げることでこ

ざいまいよう

そーて少彦名は、さらにこう述べた。

「ところで倭国は、辛卯年(三三一)に、

海北の国々九十五国を平らげましたが、倭国

の勢いはこれに留まる筈がありません。

必や近い将来、拘奴国を討伐する日が来

るでしょう。

そうです。その時こそ、母国は立ち上がるの

です。倭国が西方面から拘奴国を攻撃する際

母国は東方の背後から拘奴国に襲いかかりま

2.607^P

めがまきえ 我儘 2370 記号 4 敗残 1761^P

いよう。
その為にも、母国は、もつともつと強大な
国とならなければなりません。
ここに少彦名は、身を正し、呼吸を整える
と、平たく身を沈めて言った。
「そこでお願いがござります。私は、倭国
に居ては敗残の将、私は、母国に二度
降り、大己貴と相並び、母国を作り堅めたいと
考えているのです。聞き入れになって許諾
どうか私の勝手放題な我儘をお許し下さい
ますように、伏して懇願申し上げます。
私の決意のほどは、私の願からすでに二つ
の点が消えていること、お察しいただけ
るかと存じます。
さらに又、このように、母国からの朝貢の
使者として上洛したことによっても、御理解
いただけたことと存じます。
するとその時、悲しげな声か、少彦名の耳
に聞えてきた。
「吾子よ」

記(黒)74 神産巢日神の御祖命(母)が
 由2609-2/2 仰せられた所答えた」とある。

2.608P → 1/2

天國玉 2.5982/3 へきえ人 僻遠 1990°

それは、母の声であつた。
 7 よくぞ無事に帰つてこられたものと喜んで、
 へきえ人 僻遠の母国とやという国へ降つて行く
 おつかりか
 7 はい。母上のお心に背き、誠に申し訳
 ありませんが、私はもう胸の内に
 固く思い定めてゐるのです。
 1 か1ながら、私は、表国へ降るとはいえ
 それもひとえに倭国の爲と思えばこそでござ
 います。
 母国に居ても、私は決して母上
 1 下さい
 母は、心の内の悲しみをこらえながら、
 7 え、水ほどまでに申されるものを、どう
 て止め得まいようぞ。それでは、
 原の色許男の命(大己貴)と兄弟となつて、
 その国を作り堅めるかよい
 とおつーやつた。(神代記へ大國主神と少名毗
 古那神の国作り(余参照))

2. 608^P - 2/2

紀上148^P末3^P天八重雲
内情を採^て2602^とに

■なお、先述のように、神代下第九段（本文）

には

「あまのほみのみこと」

「天穂日命を以て往きて平けりむ」

「此の神」

「大己貴神に安り媚ひて」

「比及るまで」

「尚」

「と記されて」

「い」

「あまのほみのみこと」

「天穂日命は」

「翔けり」

「御返事を奏した」

「という」

「出雲大社」

「千家尊統」

「学生社」

「昭和四十三年八月二十五日発行」

「二四五頁」

「八二頁」

「※まいったく」

「その通り」

「た」

「のであろう」

「と」

「あまのほみのみこと」

「天穂日命を以て往きて平けりむ」

「此の神」

「大己貴神に安り媚ひて」

「比及るまで」

「尚」

「と記されて」

紀上 350' ¹
 紀(黒) 182' ²

天門寺
改新

$$2,609^P - 1/2$$

(中) 2602° 南殿 = 紫宸殿 元1662°
強い ← 弱い
① 皇太后 元749° 現天皇の生母
② 皇太后 元273° 皇后の敬称

おほとの
大 殿
で
の
宴

こうして、盟約が交わされ、倭国と丹国の二国

■是の日、
 皇太后（天皇の生母）は、
 皇と少彦名の爲に、大殿（後代の南殿）は、
 殿舎（~~殿舎~~）ううで宴会を催し
 になつた。

神功皇后紀撰政十三年二月十七日条に、こ

七 十七日に 太子へか づての 太子の 薨と 解
 される 角鹿より 至りたまふ 是の日 因りて 歌
 皇太后 太子に 大殿に 宴したまふ 皇太后
 を 擧げて 太子に 壽したまふ 因りて 歌
 て 曰はく 此の 御酒は 吾が 御酒 ならず 云々

とあろ

2 次 の よう に 解 決 し て み た い
ほむたのすめらみこと
つるか
そうとう

● 饗田天皇が（敷賀に相当する）香椎から
邪馬台国の都へ帰還された是の日（534）
矢皇

の
母ともいふべき
天照大神
ニニ
において

新ヤ 01-119頁下 美味 206 神功皇后 210 石壺 伊勢神宮 61 紀上 29 記 182 2,609 - 7/2 新ヤ 01-119頁下 大和 350 記 182 新ヤ 01-119頁に合わせる 2603 175

荒筋第一編『出雲国の国造』において既述

香わーく、うーてまうやかだつた。
 うーこの世のものは信じられなほどに
 と仰せられた。神功皇后紀・神功皇后記参照
 口に含むその神酒は、何という旨さだらう
 残さずお飲みなさいでささ
 上ーてきた御酒のある御酒です。さあ
 郷（邪馬台国）の都の石壺の上に立つておい
 せん。この御酒は、私が造った御酒ではありま
 常世に坐す石立たす少御神の豊奉
 里来し御酒ぞあさお飲せささ
 皇太后（天照大神・市杵島姫命）は、酒をな
 みなみとついだ盃を舉げて、大王をことほぎ
 になり、うーて歌をよんで、
 この御酒は吾が御酒ならぬ神酒の司
 常世に坐す石立たす少御神の豊奉
 き奉き廻ほし神奉き奉き狂ほし奉
 催された。

私（神功皇后）に

我内か太子の恙上
答歌は。
紀上350'末2行

る。このうゝとは不得手だったのかも知れない。
そこで、武内宿禰が大王にかわって答歌を
詠み下。
この御酒を醸みけむ人は、その鼓臼に
立てて歌ひつつ醸みけれかも舞ひつ
つ醸みけれかも。この御酒の御酒の
あやにうただのーささ
へこの御酒を醸した人は、その鼓を臼のよ
うに立てて打ち鳴らし、歌いながら発酵を促
進させ、舞いながら醸したという。それだから
この御酒の、御酒の何とも美味しく、むしろ
うに楽しいことよ。ささ
と申し上げた。神功皇后記・神功皇后紀参照
朗報を齎した少彦名を慰労う常世郷の酒宴
が、くる日もくる日も続いていった。
神仙の国の酒肴を味わい、舞ひ、歌や踊り
に打ち興ずる楽しい日々は、昔とすこしも変
らなかつた。
なつかしい知己の者達と、旧情を温めあつ
てゆくにつれ、少彦名の心の内には
日毎夜毎に、倭国を去り難く思う気持が募つ
ていった。

(魏志倭人伝参照)

台國の都に上洛してきた少彦名は、母國へ歸ら
 なければならなかった。
 大己貴曰天え葦根と固く誓った約束事
 を、少彦名は忘れていなかった。
 少彦名は、遙かに遠い東の異國の地に骨を
 埋める決意もあらたに、断ち難い思いを無理
 やりようにして、邪馬台國の大宮人達に別水
 を告げた。
 引き剥がすかの
 母國あへて付言すると、東海のか
 なたの母國は、こうして倭國の属國にな
 った。
 したかつて、属國からの使者である少彦名
 を、長年月にわたって留め、接待するなどと
 いうことはしなかったろう、と推察される。
 また倭國の朝廷は、大己貴曰天え葦根と
 親倭母王と為し、金印紫綬を假し、
 前漢鏡・後漢鏡・三角縁神獸鏡等の銅鏡多数
 阿蘇で取れる丹等々を賜ったのではなかつたか。